

中学の同級生同士で、バンドを組もうということになり、それぞれパートを決めて、楽器を買って、4人で集まって練習を始めて、次はライブというやつをやってみよう、というわけで、挑んだ時のこと。

ギターはアンプの前に、ドラムはバスドラやスネアに1本ずつ、マイクを付けて、音を拾ってPA卓に送る。ということを知って、びっくりした。そんなこといちいちやんなきゃいけないの？ めんどくせえ！ という意味で。

だって、ギターに付いてるピックアップって、弦の音を拾うマイクでしょ。そのマイクで拾った音をアンプから出して、それをまたマイクで拾わなきゃいけないの？ え、ベースとキーボードはマイクいらない？ あ、ラインっていうのね。じゃあ、ギターもドラムもそれでいいじゃん。

って、それでいいわけないことは後に理解したものの、「めんどくせえ！」という思いは、どうしても拭えないままなのだった。だって、とくにシンセとかリズムマシンとかテクノとかあるのに。これは近いうちに廃れるな、バンドなんていう手間のかかる音楽手法は。

と思いつつ、そしてヒップホップやハウスを知るたびに「ほら出た、バンドより全然便利なやつ」などと思いつつ、なのになぜかバンドのまわりをウロウロする仕事に就いて、30年以上が経った。

で、現在。バンドという音楽手法、10年前や20年前に比べると廃れたが、40年前に僕が思った時よりも、だいぶ長持ちした。しかも、今でも完全に廃れきってはいない。

なぜか。ギターアンプのキャビネットとマイクの間、ドラムセットのスネアとマイクの間、何かがあるから。ギターとアンプを結ぶシールドの間、何かがあるから。

もうちょい広げて言うと、複数人間が生で楽器を鳴らして、そこに歌をのつける、というまだるっこしいことを経由しないと成り立たない、計算や狙いでは不可能な何かを、実現できることがあるから。だからバンドなんていうめんどくさいものが、今もなくならないのだろう。

以上、人んちのバンドの宣伝資料で、個人的な思い出話を延々と書いてしまっただけで申し訳ない。が、このBug Holicの曲を聴いていると、ついそのようなことを考えてしまうのだ

った。

「ライブできない」「集まらない」「だからヒット曲＝バイラルヒット、という図式が強固なものになった」2020年2月末以降のコロナ禍の中において、わざわざバンドとして活動を始め、ライブができないので配信で楽曲を発表することしかできず、でもちょっとコロナが収まった時期に初めてライブをやったら、けっこうな人が詰めかけた、という。僕が初めて観たのは三回目のライブだったが、「三回目これ？」と驚くくらいの、どの対バンよりも多いお客が集まっていた。

スマホひとつあれば、いくらでも音楽を作れる現在のクリエイターたちから、浮いている感じは、ない。むしろ、力いっぱいその世代ならではの感じである(歌詞もメロディも、音の組み立て方も、MVもアーティスト写真もそうだ)。

なのにバンドをやっている。バンドという面倒な音楽手法をわざわざ選んでいる。音源はあきらかに「なるべく生のままにする」とは逆の「PC上で緻密に作り込む」タイプなのに、ライブでは、バックトラックよりも生の演奏に重きを置いている。たとえそれによっても、音が荒くなったり、綻びが出たりしたとしても。いや、たぶん、だからこそ。

つまり彼らは、「今ならでは」の音楽の魅力と、「めんどくささの間に何かがある」バンドによる音楽の魅力の両方を手にしたいから、そうしているのだろう。言うまでもないが。

そのような「今敢えてバンド」な存在、現在の日本に、他にいないわけではない。が、それらの中でも、より強い確信と自信をBug Holicには感じる。で、確かに、それを持てるだけの楽曲集だと思う、このファースト・フルアルバムは。

わかりやすい成功例で言うと、The 1975とか、なんで今わざわざバンドなのかが、(あれだけ売れたから、というだけではなく)わかりますよね、聴けば。あるいは、ライブを観れば。というのと並べてしまうのは、さすがにちょっとあれだが、「あ、こんな方法があったか！」というワクワク感に満ちている、という点では、名前を出してもいいかも、と思ったので、出しました。

(兵庫慎司/音楽ライター)